

金銀花と忍冬藤

中醫クリニック・コタカ 小高修司



金銀花は忍冬 *Lonicera japonica* Thunb. (和名：スイカズラ) 及びその同属植物の花蕾、忍冬藤は茎枝である。忍冬の名は『名醫別録』に初載であり、共に清熱解毒作用を主とするが、忍冬藤は通絡的作用もあり風湿熱痺にも用いられる。一般には共に味は甘、性は寒（微寒）とされているが、『名醫別録』には忍冬を「甘温」としており、それを『本草拾遺』（739、陳藏器）は「小寒。温と云うは非なり。」と記す。だが『本草綱目』（1590、李時珍）には小字注を併記するものの「気味甘温無毒」としており、その影響か現代もっとも大部の本草書である『中華本草』（1999、上海科学技術出版社、全10冊）にも見られる。つまり忍冬藤には「薬性」に「甘寒」と記載されているのに、金銀花の項には「薬性」自体の記述が見られないのである。

以下、忍冬に関するいくつかの知見を記してみたい。

1, 処方名：两个三两三 (1)

1988年に東京都の東洋医学事業の一環として新設された東洋医学専門外来に於いて、私は都の姉妹都市である北京市より派遣された北京中医医院内科主任の張炳厚先生(後に北京市中医管理局局長)に徹底的に中医学の基礎を叩き込まれた。その中で彼が慢性疼痛関節疾患、特に関節リュウマチ患者に使用したのがこの処方である。当帰、川芎、忍冬藤(寒痺の場合は鶏血藤)を各一両(30g)、穿山甲(蜈蚣または全蝎で代用)三銭(9g)、田三七・三分(1g)から成る。

近年動物生薬の入手が困難になっており、リュウマチ・神経痛に対しては桂芍知母湯を基礎にして、本処方を配慮して以下の生薬を加味して用いることが多い。当帰 15-30g、川芎 9-15g、鶏血藤(または忍冬藤) 15-30g、田三七 3g、そして熱痺の場合は鶏血藤に代えて石膏・知母を併用するが、現代人の食習慣から寒痺もしくは虚熱痺(患部に熱感があるものの、暫く触っているとその熱感が減少する)が相対的に増加しており、患者が疼痛部に熱感を訴えたとしても、舌診を参考にして慎重に診断する必要がある。

主題とは離れるが、ここでガンをはじめとする「瘀血が引き起こす肢体疼痛」に対し有効な処方を提示したい。それは湖南省の名医・劉炳凡老師の処方「三藤湯」(2)である。上記した鶏血藤に雞屎藤けいしとう(または鶏矢藤けいしとう)、常春藤を組み合わせたもので(各)15-30gを用いる。鶏矢藤 *Paederia scandens* Merr. (和名：ヘクソカズラ、ヤイトバナ)には通絡止痛作用が、キツタ属の常春藤 *Hedera nepalensis* K. Koch var *sinesis* Rehd.には祛風、利湿、和血、解毒作用がある。有効例が多いので是非試みられたい。

2, 忍冬酒

この酒は江戸初期（慶長元年）から昭和18年まで浜松をはじめとして紀州、伊勢、筑後、肥後、会津、仙台で作られ販売されていたという（3）。利尿作用があり、膀胱炎、腎臓病、各種の皮膚病、強壯、強請にも効き目があるとされる（4）。国産のこの薬酒は忍冬以外にも他の薬草を加え焼酎(?)に漬けたものだが、実は中国にも同名の酒がある。

歴史的には三因極一病証方論（宋、陳言、1174）には、忍冬を炒甘草と一緒に(5:1の割合)に酒に入れ煮て温服する。「癰疽腫毒を治するに甚しく効く」とある。以後製方は基本的に同じで、『外科精要』（1263、陳自明）には「背に発した癰疽、婦人の乳癰を治す」とあり、さらに『本草綱目』には全身何処の癰疽でも治療ができると記載されている。日中で多少使用目的に差があるようである。

当院での忍冬酒は金銀花、忍冬藤(各)50gを1.8Lの焼酎に浸漬する。ちなみに薬酒はホワイトリカーを用いるよりも、いわゆる乙類焼酎を用いる方が浸出率が高く好ましい。

【文献】

- 1, 小高修司：張炳厚先生の症例検討、中医臨床 11(2) 132-136,1990
- 2, 劉光宪著：劉炳凡臨床秘訣 pp.223-224, 湖南科学技術出版社、2004
- 3, <http://www.asaichi.info/nindou/>
- 4, <http://www.e-yakusou.com/yakusou/250.htm>